

CITATION: Liu J, Wang LN. Gamma aminobutyric acid (GABA) receptor agonists for acute stroke. *Cochrane Database of Systematic Reviews* 2014, Issue 8. Art. No.: CD009622.DOI: 10.1002/14651858.CD009622.pub3.

CRG名: Cochrane Stroke Group

[最新版\(英語版\)はこちら](#)

英語版最終改訂年月: 5 JUN 2014

Clib issue No.;N/U: 2014 Issue 8; Update

アブストラクト

背景: γアミノ酪酸(GABA)受容体作動薬は、動物の脳虚血モデルで梗塞範囲の縮小や機能的アウトカムの改善において神経保護効果を示すことが分かっている。しかし、GABA受容体作動薬の鎮静効果には潜在的昏迷リスクが伴うために、急性脳卒中患者におけるその広い適用範囲が限定されている。

目的: 急性脳卒中の治療におけるGABA受容体作動薬の有効性と安全性を検討すること。

検索戦略: Cochrane Stroke Group Trials Register(2014年2月)、Cochrane Central Register of Controlled Trials(CENTRAL)(コクラン・ライブラリ2014年、第5号)、MEDLINE(1949~2014年6月)、EMBASE(1980~2014年6月)、CINAHL(1982~2014年6月)、AMED(1985~2014年6月)および中国のデータベース11件(2014年6月)を検索した。さらに発表済、未発表および進行中の試験を同定するために、進行中の試験の登録リスト、参考文献一覧および関連性のある学会予稿集を調べ、著者や製薬会社に連絡を取った。

選択基準: 急性脳卒中患者(脳卒中発症後12時間以内)を対象に、死亡または自立困難、機能的自立および有害事象のアウトカムについて、GABA受容体作動薬をプラセボと比較検討したランダム化比較試験(RCT)についてレビューした。

データ収集と分析: 2名のレビューアが個別に、同定された記録のタイトルと抄録を選別し、レビュー対象となる研究を選び、適格なデータを抽出し、正確性を期すためにデータを照合確認し、方法論的質を評価した。

主な結果: 患者3838例対象の試験5件についてレビューした。レビュー対象とした試験の方法論的質は概ね良好で、バイアスリスクは低かった。3ヵ月時の死亡と自立困難について、クロルメチアゾールとプラセボを比較検討した試験が4件あったが、有意差はなかった[リスク比(RR) 1.03、95% CI 0.95~1.11]。このアウトカムについて、ジアゼパムとプラセボを比較検討した試験は1件であった(RR 0.94、95% CI 0.82~1.07)。広範囲前循環症候群(TACS)のサブグループ解析では、クロルメチアゾール群の方が、機能的自立の割合が高かった(RR 1.33、95% CI 1.09~1.64)。クロルメチアゾールに関連して頻発した有害事象は、傾眠(RR 4.56、95% CI 3.50~5.95)と鼻炎(RR 4.75、95% CI 2.67~8.46)であった。

レビューアの結論: 本レビューでは、急性虚血性または出血性脳卒中患者の治療におけるGABA受容体作動薬(クロルメチアゾール又はジアゼパム)の使用を支持するエビデンスが得られていない。サブグループ解析によると、クロルメチアゾールはTACS患者の機能的自立の改善に有益であると思われたが、この結果はかなり慎重に解釈しなければならない。確認を進めるには、TACS症例数が多く、適切にデザインされたRCTを増やす必要がある。しかし、クロルメチアゾールに関連して頻発した有害事象は、傾眠と鼻炎である。

平易な要約(Plain language summary)

急性脳卒中に対する γ アミノ酪酸(GABA)受容体作動薬

GABA受容体作動薬は、急性脳卒中の治療で脳を保護するのに役立つ神経保護薬の1種です。ジアゼパムやクロルメチアゾールなどが含まれるこの薬剤クラスは、数十年間使用されており、動物の脳卒中モデルで有効であることが分かっている既存の鎮静薬です。ところが、GABA受容体作動薬の鎮静効果は、昏迷状態になる潜在的风险のある急性脳卒中患者には有害となるおそれがあります。今回、急性脳卒中患者におけるGABA受容体作動薬の利益と安全性を検討する目的で、患者3838例を対象とした試験5件をレビューしました。結論として、急性虚血性または出血性脳卒中患者の治療におけるGABA受容体作動薬の使用を支持するエビデンスはありませんでした。最も発現頻度の高いクロルメチアゾールの有害事象は、傾眠と鼻炎でした。

(監訳 江川 賢一)

翻訳公開日：2015年9月1日

ご注意：この日本語訳は、臨床医、疫学研究者などによる翻訳のチェックを受けて公開していますが、訳語の間違いなどお気づきの点がございましたら、Minds事務局までご連絡ください。なお、2013年6月からコクラン・ライブラリーのNew review, Updated reviewとも日単位で更新されています。Mindsでは最新版の日本語訳を掲載するよう努めておりますが、タイム・ラグが生じている場合もあります。ご利用に際しては、最新版(英語版)の内容をご確認ください。